
蘇鉄の木

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蘇鉄の木

【Nコード】

N3705D

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

天下人豊臣秀吉。彼は堺で見つけた銘木を自分の城である桃山に移した。すると城の庭で夜な夜な泣く声が聞こえて。石田三成のいいお話です。

第一章

蘇鉄の木

文禄三年のことである。この時の天下の主は豊臣秀吉であつた。

彼は一介の農民から天下人になつたが日本の権力者としては異例な程派手好みであつた。それは美というものに関しても同じであつた。

とかくみらびやかなものを好んだ。金を愛し花にしる木にしるそうであつた。だが時として静かなものも愛するという繊細な感性も備えていた。それはこの時も同じであつた。

彼が堺の妙国に來た時のことである。そこで見た見事な老木に心を奪われたのだ。

「これはよい木じゃ」

「確かに」

彼の側近の石田三成がその言葉に応える。小柄で猿顔の主に対して鋭利で整つた顔立ちをしている。顔からも切れ者であるということが窺える。

「これは中々。見事なものです」

「のう、治部よ」

秀吉はここで三成をこう呼んだ。彼の朝廷での役職であり彼の仇名と言つてもいいものになっている。

「この老木をずっと見ていたくなつた」

「では大阪へ移されるのですかな」

三成はそれを聞いて述べた。

「大阪の城へ」

「いや」

だが秀吉は首を横に振る。そうではないというのだ。

「それは止めておこつ。この木は大阪には合わぬ」

「ではどうさるのですか？」

「桃山じゃ」

秀吉の返事はこうであつた。桃山にも彼が築いた城がある、やはり美しい城であり彼の象徴の一つとも言える存在であつた。

「桃山に移したい。それでどうじゃ？」

「桃山ですか」

三成はそれを聞いて考える顔になつた。暫し考えてから秀吉に対して答えた。

「ここでよいのでは？」

「何故じゃ」

「何処となくであります」

そう前置きしてまた秀吉に対して述べる。

「この木はここにあるからこそ相応しいように思えてきました」

「ここにあるからか」

「はい、あくまで私の考えです」

一応はそう断るが三成自身はこの木が今ここにあるこの風景に合っているのではないかと思えていた。それは調和的なものであり彼の美観によるものであつた。

だが秀吉の美観はまた異なる。彼はそれを承知していた。そのうえで話をしていることもわかつていた。

「ここにあつた方がいと思ひますが」

「いや、わしはそうは思わぬ」

秀吉がこう言うことはわかつていた。だから驚かなかつた。

「やはり桃山で見たい。この木は桃山にこそ相応しい」

「それではやはり」

「うむ、すぐに人夫達を集めよ」

そう三成に命じる。

「桃山に移して見続ける。よいな」

「わかりました」

三成もこれといって反対はしなかつた。時として秀吉に対しても厳しいことを言う彼であるが今回はたかだか一本の木であるからそ

れは留めたのである。こうしてこの老木は桃山に移された。秀吉は桃山においてこの木を満足気に見て楽しむのであった。

「ふむ、やはりのう」

城にある自身の屋敷の庭に移された老木を満足した顔で見ている。

「この木はやはりここにあってこそじゃ」

「いや、全く」

「その通りです」

側の者達がそれに相槌を打つ。彼等にとってはこれも仕事なので特にそうは思っていない者もいる。三成もそれは気にしてはいなかった。

「そうじゃろう、治部よ」

「そうですな」

三成は表情を変えず秀吉に応えた。

「確かに悪くはありません」

「そうじゃろう、そうじゃろう」

「ただ。一つ思うのですが」

「むっ！？何じゃ」

秀吉はそれを聞いて三成に顔を向けた。そうして彼に問うのであった。

「この木はここにいて幸せなのでしょうか」

「幸せか」

「はい。今ふと思ったことなのですが」

そう秀吉に述べる。

「木がそう思うと考えるのは。いささか滑稽でありましょうが」

「ふむ。それは少しな」

秀吉もこれには頷くことはなかった。彼の知恵をよく知ってはいるが。

「的外れではないか」

「左様ですか。それではここにあって特に困ることはありませんな」

「わしはそう考える。それはそうとしてじゃ」

ここで秀吉の言葉が景気よくなった。

「酒はどうじゃ。よいのを貰ったのじゃ」

「酒をですか」

「うむ、太夫からな」

福島正則のことである。秀吉にとっては数少ない子飼いの武将の一人でもある。なお三成とは秀吉の死後激しく対立することでも有名である。

「わしに献上してくれたものじゃ。どうじゃ」

「そうですな。是非共」

三成もそれには少し笑顔となつて頷いた。酒は嫌いではない。飲まれる性質の男ではないがそれでも好きかというところからかというとそうであつた。だからこそ断らなかつた。

第二章

「頂きます」

「御主等も飲め」

秀吉は共の者達にも声をかけた。そうして飲むように言う。

「遠慮は要らぬぞ」

「おお、それは有り難い」

「では我等もご相伴を」

「皆で楽しみばよいのじゃ」

秀吉は明るく大きく笑って言った。

「それで心ゆくまで飲もうぞ」

秀吉の人気の秘密はここにもあった。氣前が抜群によく飾らない性格だからだ。そうしたこともあり天下人になれたのだ。三成もそんな秀吉が嫌いではなかった。彼は今は微笑んで秀吉を見ていた。しかし怪異はこの日の夜にもう起こったのであった。

その夜。見回りの兵が城の庭に入った時であった。そこに何者かを見た。

「むっ!？」

白い人影であった。人影は庭の中を歩き回っていた。兵はそれを見てすぐにその側まで迫った。

「待て、怪しい奴」

彼はすぐに曲者かと思った。そうしてすぐに手にしていた槍をその影に向けて突き進んだ。しかし槍は虚しくその人影を通り抜けたのであった。

「何とっ」

「私は曲者ではございません」

驚く彼にそう人影が告げてきた。見れば何のことはないただの老人であった。髭のない顔に一面の皺がある。何処か弱々しい顔をしている。

「決してどなたも傷つけるつもりはござらん」

「ではどうしてここににいるのだ」

兵はそう彼に問うた。ここににいるのにはあまりにも不自然であつたからだ。

「連れて来られたのです」

「連れて来られただと」

「はい」

そう兵に答えた。

「その通りです。それで」

「うつむ、訳がわからぬ」

兵は老人のその言葉を聞いて首を傾げる。見たところ槍が突き抜けた以外はごく普通の老人である。その彼がどうしてこの城に連れて来られたのか、彼には合点のいかない話であつた。

「それはどうということなのか」

「秀吉様に連れて来られました」

「太閤様にか」

「そうです。私はここにはいたくありません」

悲しい顔と声での言葉であつた。

「故郷に帰りたいのです。あの穏やかな故郷に」

兵に対して訴えて語るのであつた。この老人が出たのはこの日だけではなかつた。次の日もまた次の日もであつた。当然ながら秀吉の耳にも入り彼は三成に対して言うのであつた。

「これは一体どうしたことじゃろうな」

「その老人ですか」

「うむ、夜な夜な庭に出て来ておる」

そう三成に語る。

「そうして帰りたいと兵に告げる。わしにここに連れて来られたとな」

「殿下にですか」

「ここに年寄りを連れて来た覚えはない」

秀吉は服の中で腕を組んでいた。そうして三成に述べた。

「そんなことはな。じゃがその年寄りにはわしが連れて来たと言う。全くおかしいことじゃ」

「いや、これは」

だがここで三成は言うのであった。

「おかしいことではありませんね」

「そうなのか？」

「はい、その老人はおそらく木です」

こう秀吉に述べた。

「殿下が堺より移したあの木なのでございます」

「あの木か」

「そうです。だからこそ帰りたいと申すのでしよう」

三成は静かに秀吉に述べた。

「堺に」

「左様か」

「帰りたいと言っている者に無理強いはなりませんまい」

三成はまた述べた。

「ですからここは」

「そうじゃな」

そして秀吉もそれに頷いた。彼とて決して無法な男ではない。情も知っている。だからこそ今三成の言葉に頷いたのである。

「それではそのようにしよう」

「はい。それが宜しいかと」

「わしとて木は楽しく見ておきたいものじゃ」

老木を見る。その秀吉の目は限りなく優しいものになっていた。

「それに悲しむ姿は見るもの聞くのも忍びない。ましてそれがわしが原因ならば」

「それでこそ殿下です」

三成はここで秀吉を褒め称えた。

「天下人であらせられます」

「そうじゃな。しかし天下人というのは案外不自由じゃ」

秀吉はふと苦笑いを浮かべた。

「こういうことでも気を使わなければならぬのじゃからな。しかし」

「しかし？」

「それでも悲しむ顔よりは笑顔の方が見たいものじゃな」

そう言つて木を見るのであつた。その後間も無く老木は元の堺に戻された。それから老人が出るという話は消えた。秀吉は堺でその老木を見ることにした。これもまた天下人の逸話の一つである。

蘇鉄の木 完

2007・11・21

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3705d/>

蘇鉄の木

2010年10月8日13時45分発行